

信仰生活の基本形は、み言葉に聞き、祈ることであると言われます。しかし、そのことが頭では分かっている、人生の歩みの中で、私たちはしばしば神の言葉を正しく聞くことが出来なくなるような時を経験します。み言葉がすこしも頭に入らない。「腑に落ちる」というかたちで、すっきりと理解できない。何よりも、今のこの自分が抱えている悩みや問題に、み言葉がまったく解決を与えてくれない。そう思えるような時を経験するのです。そのようなとき、私たちはどうすれば良いのでしょうか。我慢するのでしょうか。それとも、しょせん信仰なんてそのようなものさ、と開き直り、神さまに背を向けて生きるのでしょうか。み言葉が、私たちの差し迫った切実な問題にすぐには解決を与えてくれない、そうとしか思えない、そのような時間のなかで、それでもなお神の言葉に聞くということ、そのためにはどうすれば良いのか。本日は、この問題について、マタイによる福音書 15 章 21 節以下を与えられた聖書箇所として、ここに登場する一人の婦人の例を通して、ともに考えてみたいと思います。

主イエスが、ティルスとシドンの地方に行かれたときのことで、ティルスとシドンという地名は、ガリラヤの北方にある地中海沿いの港町として知られる地名です。平行記事のマルコ福音書 7 章をみると、この女性は「シリア・フェニキア生まれの女」と記されています。これらの地中海沿岸の港町は、かつて海上交易によって栄え、オリエントとエジプト、オリエントと地中海地方の橋渡しの役割を担いました。フェニキアというアルファベットの原型となるフェニキア文字を生んだ国であり、またローマと地中海の覇権をめぐって戦ったカルタゴという植民都市を生んだ国です。そのような地方に、イエスとその一行は足を運んだのです。表題に、カナンの女とありますが、ヨシュア記にもあるように、このカナン地方には、もともとパレスチナ人が住んでおり、そこにイスラエルが攻め込んで彼らを追い払い、自分たちの領土としたという歴史があります。パレスチナの人々とユダヤ人との対立関係は、主イエスが登場されたこの時代も変わらなかった。おそらく、主イエスはガリラヤでの伝道生活に疲れを覚え、リトリート（退却）のつもりで、しばしの休息を求めて、本日の地域を訪れたのではないのでしょうか。するとそのとき、この地方に生まれたカナンの婦人が、主イエスのもとに駆け寄ってきて「**主よ、ダビデの子よ。わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています**」と叫んだというのです。「叫んだ」と訳されるギリシャ語の動詞は、継続の意味をもつ用法（未完了形）で書かれています。「叫び続けた」ということです。これは、間違いなく、とても勇気が要る行動でありました。「ダビデの子」という称号は、「ユダヤ人の救い主」を表す呼び名です。カナン人にとっての救い主ではありません。むしろカナン人は、ユダヤ人から軽蔑の対象と見なされていた。律法を少しも守らない汚れた民と見られていたのです。もしも、彼女の叫びを現地の誰かが耳にしたら、反発を招きかねない言葉です。「なぜ、われわれの敵であるユダヤ人の救い主の名を呼ぶのか」と。

福音書の他の箇所では、子どもや家族の救いのために父親が訴えに来る記事がよくあります。会堂司や百卒長といった人々たちです。父親がいれば、父親が訴えに来るのが普通であったと思われます。しかし、ここでは母親が、直接娘の病気のことを訴えています。彼女は未亡人であったのかもしれませんが。だとすれば、彼女の立場はあっさり弱くなります。病気の娘を抱えた、よるべない寡婦である異邦人女性ということ。彼女は、このとき我を忘れていました。必死でした。娘の病気の事で頭が一杯で、その子のことが、寝ても覚めても心配でならない。そんな時、イエスというユダヤ人が、ガリラヤで宣教活動を行い、み言葉と奇跡の業によって多くの人を救ってこられた。その方がこちらにも来ておられる、という噂を耳にします。「この方であれば、娘の病気を癒してくれる。救ってくださるかもしれない。いや、そうしてくれるに違いない」そう確信して、彼女は足早に主イエスの一行に近づき、「**主よ、ダビデの子よ。わたしを憐れんでください**」と叫び続けたのであります。

ところが、続く 23 節のみ言葉を見てください「**しかし、イエスは何もお答えにならなかった**」——皆さん、どう思われますか。冒頭に申し上げた、私たちの切実な願い求めに対して、神さまが何の力にもならないと思える時がある、とはこのことです。「イエス様、何故だまっているのですか。なぜ、彼女に励ましや慰めとなる言葉をかけてあげないのですか」私は、そう思います。ここで、主なる神は沈黙されているのです。彼女の叫びだけが一方的に続くその場の状況に、弟子たちの方が耐えられなかったようです。彼らはイ

エスのもとにきて言います。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」さすがに、この弟子たちの発言は問題発言でしょう。救いを求めている魂に対して、邪魔で迷惑だから追い払ってくださいというのは、クリスチャンが語るべき言葉ではありません。イエスは、この弟子たちの言葉を聞いて、自らの沈黙の理由を、この女に語られました。24 節です。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」この言葉は、マタイ福音書 10 章 5 節で弟子たちを派遣するときに語られた言葉「イスラエルの家の失われた羊のところにへ行きなさい」とも符合しています。イエスと弟子たちの働きの使命は、まずはイスラエルの救いにあった。主は、ご自身の働きに優先順位があると考えておられたのです。

しかし、この婦人はイエスの前にひれ伏し、頭を地に着けるような姿で「主よ、どうぞお助けください」と願い求めました。ここで「ひれ伏し」と訳される動詞は、もともと「大地にキスをする」という言葉です。それほどに身を低くしてイエスに願い求めたのです。しかし、主イエスは繰り返し、救いの優先順位のことを語られます。26 節です。「子どもたちのパンを取って、小犬にやってはいけない」この言葉には、ユダヤ人の救いをまず優先した福音書記者マタイの考え方も反映されています。それは、異邦人にとっては躓きでしょう。しかし、私たちは悟らねばなりません。神の言葉は、時にわたしたちを躓かせるのです。このカナンの婦人は、まず 23 節で主の沈黙を経験し、つづく 26 節で明らかな拒否を経験しました。神の助けを求めたのに、それに応える救いと癒しの言葉を聞くことが出来なかったのです。しかし、このことは何もこの女性にかぎったことではありません。わたしたちも同じです。もしも、私たちが彼女の立場だったらどうするでしょうか。主イエスに失望し、悲しみながらそこを立ち去るのか。あるいは主を罵りながら、もう神との関係はこれで終わりとするのでしょうか。しかし、彼女はそうはしませんでした。むしろ主イエスの言葉の微妙なニュアンスの違いに一筋の希望を見出していたのです。それは 26 節の「小犬」と訳される言葉です。ユダヤ人は異邦人を犬と呼んで軽蔑していました。しかし、ここで使われている言葉は犬（クオーン）でなく小犬（クナリオン）という言葉です。この言葉は、野犬（クオーン）ではなく、家庭で飼われるペットとしての小犬のことでした。そこに、彼女はイエスの気遣い、憐れみを見て取りました。自分の名前を呼び捨てにされるか、それともさんづけで呼ばれるか程の違いです。そのニュアンスの違いに望みを置き、神の優先順位を求めたうえで、「ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」彼女はおこぼれでいいから、自分たちもその救いに与りたいと訴えたのです。主イエスの第一の使命を理解したうえで、自分たちが小犬であることをわきまえつつ、謙遜と服従をもってイエスへの信仰を言い表しました。「小犬でもパン屑は頂くのです」わたしは、主はこのカナンの女性の信仰を見て、驚かれたと思います。イスラエルの中でも、このような信仰を持っている人は少ないのではないかと。自分はこれまで、ユダヤ人の救いを第一に福音を語り告げてきたが、そうではない。救いを求める魂にユダヤ人もカナン人もギリシャ人もない、彼女の必死の願い求めを見て、主イエスのご自分の考えを、そのように軌道修正されたかもしれないのです。ある説教者は言っています。「このとき、主イエスはこのカナンの女性の必死の願い求めに、打ち負かされたのだ」と。そして、次の言葉を語られます。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願い通りになるように。」ここで、「立派だ」と訳されている元の原語は「大きい」（メガロス）という言葉が使われています。何が大きいのでしょうか。わたしは思う。それは、イエスの救いの力に対する信頼の大きさではないかと。み言葉に聞くと、こういう事ではないでしょうか。旧約の預言者や詩編の作者は、主のなさるみ業に対して、時に反発し、文句や愚痴をこぼしながらも、しかし感謝をもって主の御名を崇めることを忘れませんでした。主がつねに共にいて下さるという事実を第一の喜びとし、主がどのような御業を為してくださるかについては、第 2 の事柄、希望の事柄としたのです。み言葉に聞くと、自らの願い求めに対する解決を手に入れることだけに留まりません。むしろ、イエスを主とし、神とする姿勢の中で、神の沈黙と拒否の中にあっても、そこに示されている神の愛と権威に信頼するということです。神を正しい方として認め、たとえ答えが得られなくても、神のなされる御業に期待し、祈り願い続けることです。ときに、そのような願い求めは格闘になることもあるでしょう。しかし、その格闘のただ中でも、神がわたしたちの悲しみや痛みをともに担ってくださっていることを信じることを、それがみ言葉に聞くという事ではないでしょうか。

「祈りの精神」という本の著者である P.T.フォーサイスという人は、第 2 章「ねばり強い祈り」のなかで次のように述べています。「服従は、信仰の重要な目標である。しかし、服従は単なる屈服や諦めではない。

（中略）神の意志を変えようとする努力の中に、神の意志への服従に劣らない精神があるのである」
どうか皆さん、神の救いの出来事を体験する前に、まず神ご自身と出会ってください。主に捉えられてくだ

さい。そして、このかたに信頼してください。あなたの切実な祈りによって、神さまは救いの順番を変更してくださるかもしれません。カナンの女の信仰は、そのことを教えてくれるのであります。 祈ります。